

第 58 回 全国中学校社会科教育研究大会 大阪大会

研究総括

授業研究委員長 稲垣直斗

1 大阪大会からの学び

大阪大会では「参画」を『問い』探究の先に、『自分はどう考えるのか』『自分ならどうするのか』といった『問い』を自分事として捉えることと定義していた。この力を「社会参画力」とし、3つに分類して社会参画力を育成する授業を構想していた。これらの分類を岐中社の理論に当てはめると以下のようにまとめることができる。

大阪大会	岐中社の理論に当てはめると
消極的（潜在的）社会参加 →「自分ならどう考えるか」を内省・自覚する授業	事実認識・価値認識（個人）
象徴的・懐疑的社会参加 →「他者との合意形成」や意思決定の変化を重視	価値認識（集団）
積極的社会参加→「自分ならどうするか、どう行動するか」を通じて参画力を育成	価値認識（個人）

どのような力を育成したいのかを明確にし、先行研究をもとに、「社会参画力」を育成する授業を類型化し、明確に定義付けていたことが、大阪大会の研究から学べることである。

大阪大会においては、「中学生段階で、具体的な行動までを求めることは生徒の発達段階においては無責任な行動になりかねない。それよりも、自己の中の社会と社会の中の自己を常にリフレクションしながら問い続ける生徒を育成する授業を実践することが、生徒の社会参画力を育成する授業である」と主張されていた。

授業を通して、「社会参画力」を鍛えることに重点を置き、授業では「問い続ける」ことを中心に構成されていた。「本当にこれでいいのか」「もっと最適な考え方があるのではないか」と将来にわたって問い続けることは、岐中社においては認識を深める場である。

大阪大会においても、これからの社会で生きていくための主体的な社会の形成に参画する力を育もうとしている点は岐中社と一致している。

2 今後の岐中社の研究に関わって

昨年度より、岐中社では、価値に関わる認識を形成する授業として、社会科における合意形成に取り組んでいる。この理論化を進め、主体的に社会の形成に参画する生徒の育成のための社会科授業の在り方を県内問わず、全国に発信していけるような実践を積み重ねていきたい。